

編集後記

一九五九年に第一号が刊行されて以来、五〇年が経過した。それを記念し本号は「創刊五〇周年記念号」とし、巻頭に小特集を掲げた。

特集には、現在の中央図書館開館にあたり尽力された二人の元館長に玉稿をお寄せいただくとともに、紀要の編集に二〇年のながきにわたってかわわつてこられた松下真也氏にもお願いした。さらには、現館長の加藤哲夫先生からは、大学が掲げるNEXT125の施策のうち、学習・研究への積極的な支援という命題の中で図書館の果たすべき役割、すなわち、図書館が利用者とのようにかかわってゆくのかという点について、その具体例をお示しいただいた。玉稿をお寄せいただいた各氏には、この場を借りてあらためて御礼申し上げる。

この五〇年の間に、図書館もさまざまな変貌を遂げている。特に現在の中央図書館を含む総合学術情報センターの開館と相前後して猛スピードで進んできた機械化、情報媒体の多様化の流れには、すさまじいものがある。お二人の館長は、こうした変革の時代に図書館の舵取りをされた。今回、原稿をお願いしたのもその当時のご苦労や思い出が、そのまま今の図書館の基礎となっているのではないかと考えたからである。

記念号ということで全体の体裁にも少し工

夫をしてみた。本号の表紙を見て懐かしいと思われた方は、おそらく四〇代以上の方ではないだろうか。かつての図書館（現在の高田早苗記念研究図書館、會津八一記念博物館）は、壁一面を蔦に覆われており、図書館と言えば「蔦」と入り口にある「石羊」（ゴールドン文庫）がシンボルとなっていた。本誌も創刊当初はこの蔦や石羊が表紙を飾っていた。今回、創刊号の表紙をそのまま再現してみたが、読者諸氏にはいかがであつたらう。さらに巻頭言も、創刊号に寄せられた当時の大野館長の言葉を再録した。これは紀要創刊の決意表明のようなものであり、過去にも再録されたことがある。

表紙を再現したり、かつての巻頭言を再録したり、なんとも懐古趣味的な作りのようだが、当時の図書館や図書館員が目指していたもの、求められていたものまで古臭いものとは限らない。「地味な努力を積みかさね、好意ある奉仕を惜しまぬことと、図書、資料および図書館に関する研究に打ちこむことが必要」とは、現在の図書館員に求められているものと同じではないだろうか。いみじくも、今回文章を寄せてくださった元館長は、ともにこれからの図書館に必要なこととして、資料収集をあげている。過去の伝統を踏まえ、一層の館蔵資料の充実、そのための選書が重要だとのお言葉である。これまでの歴史の中で、図書館がどんな考えで、どういった資料を収集してきたのか、その上で、今求められている資料は何なのか、それを探りあてる喫

覚を研ぎ澄ますこと、すなわち、「選書」するための知識と経験をより一層深めてゆくことが図書館員には求められている。

図書館では今、新たなサービス体制の確立を目指し、基盤業務の整備と確実な遂行のための業務集約、すべての図書館利用者への学習・研究支援体制を拡充するための施策を検討し、実行に移しつつある。こうした中で一人ひとりの図書館員は、まず第一に、図書館にあるべき資料が何か、自分なりの考えをまとめとっておかなくてはならない。そしてその過程で得られた成果を積極的に発信してゆくことが重要である。本紀要は、その情報発信の場としての機能をこれからも果たさなくてはならない。（藤原記）

図書館紀要編集委員会

藤原秀之（図書館調査役）

久保尾俊郎（資料管理課）

鹿角もえぎ（資料管理課）

早稲田大学図書館紀要 第56号

二〇〇九年三月十五日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要

発行人 中 元 編集委員会 誠

印刷所 三美印刷株式会社

発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一

〇三（三三三）四一四一